

# 旧制富山高等學校開校100周年を前に

— 「富山高等學校開校記念碑」を読む —

令和4年・7月4日

富山大学・理事

磯部 祐子

# 1923年 「県立」 の高等学校として開学

## 中学校令 (1886年)

**官立** 【東京】 第一高等中学校 (1886年) ⇒ 一高 (1894年)

【仙台】 第二高等中学校 (1887年) ⇒ 二高 (1894年) 【京都】 第三高等中学校 (1886年) ⇒ 三高 (1894年)

【金沢】 第四高等中学校 (1887年) ⇒ 四高 (1894年) 【熊本】 第五高等中学校 (1887年) ⇒ 五高 (1894年)

## 第一次高等学校令 (1894年)

**官立** 【岡山】 六高 (1900年) 【鹿児島】 七高造士館<再興> (1901年) 【名古屋】 八高 (1908年)

## 第二次高等学校令 (1918年 3年制)

**官立 (3年制)** 新潟高校 / 松本高校 / 山口高校 <再興> / 松山高校 (1919年)

水戸高校 / 山形高校 / 佐賀高校 / 弘前高校 / 松江高校 (1920年) 大阪高校 / 浦和高校 /

福岡高校 (1921年) 静岡高校 / 高知高校 (1922年) 姫路高校 / 広島高校 (1923年)

**官立 (7年制)** 東京高校 (1921年) / 台北高校 (1922年)

**公立 (7年制)** 富山高校 (富山県立、1923年) /

浪速高校 (大阪府立、1926年) / 府立高校 (東京府立、1929年)

# 富山高等學校開校記念碑（1949年頃<sub>右下</sub>）



▲旧文理学部本館(蓮町) 1949(昭和24)年頃

# 富山高等學校開校記念碑（2022年人文学部前）



岡山高等學校開校記念碑

大正十三年春三月 今上天皇御在 東宮  
御成婚大典中外欽仰靡弗表其慶前北岩瀨  
島湯春子自于官曰縣下未有高等學校之設  
誠憾事也請納資建立用紀奉祝縣子伊東喜  
八郎深懸其議乃相地於城東經始為是實本  
校之所由初始也十二年冬十二月舊學習院  
教授南日恒太郎補學校長恭業益振翌年秋  
東宮殿下簡特使閱校況僉以為榮詔和三年  
今上即位之歲本校體制已完成矣土地剝  
規模宏敞東通劔山之靈西挹神江之勝爰宣  
察令巍然聳立凡百施設咸莫不完備會前日  
校長延殉子藏教授榮山槐評繼其任於是內  
外相謀卜十月十七日舉行開校祝典是日也  
湖野官民來助其儀者以千教蓋亦盛矣於歲  
本校殉子 東宮成婚之時而成于 今上即  
位之際天下未有如斯休美者也况又嘗沐我  
皇眷顧者哉列籍本校者仰而思之則不待發  
揚倘導而自有所感奮興起者矣然則建碑紀  
盛豈獨傳諸不朽云爾哉銘曰

維我學校

既固既全

宸眷靈被

光輝永傳

奉揚亦迄

朝夕乾乾

修文藻式

以答聖天

大正三年

今上即位之歲十月中浣

富山高等學校開校記念碑

大正十三年春正月 今上天皇時在 東宮  
行成婚大典中外欽仰靡弗表其慶前此岩瀨  
馬場春子白于官曰縣下未有高等學校之設  
誠憾事也請納貲建立用紀奉祝縣尹伊東喜  
八郎深韙其議乃相地於城東經始焉是實元  
校之所由剏始也十二年冬十二月舊學習院  
教授南日恒太郎補學校長基業益張翌年秋  
東宮殿下簡特使閱校況僉以為榮昭和三年  
今上即位之歲本校體制已完成矣土地剛燥  
規模宏敞東通劔山之靈西挹神江之勝鬢堂  
寮舍巍然聳立凡百施設咸莫不完備會南日  
校長遽殉于職教授柴山槐郎繼其任於是內  
外相謀卜十月十七日舉行開校祝典是日也  
朝野官民來助其儀者以千數蓋亦盛矣於戲  
本校剏于 東宮成婚之時而成于 今上即  
位之際天下未有如斯休美者也況又嘗沐我  
皇眷顧者哉列籍本校者仰而思之則不待發  
揚倡導而自有所感奮興起者矣然則建碑紀  
盛豈獨傳諸不朽云爾哉銘曰

維我學校 既固既全 宸眷寵被 光輝  
永傳

奉揚弗忘 朝夕乾乾 修文練武 以答  
聖天

昭和三年 今上即位之歲十月中浣

## 富山高等學校開校記念碑

大正十三年春正月 今上天皇時在東宮。行成婚大典、中外欽仰靡弗表其慶。

前此岩瀨馬場春子白于官曰、「縣下未有高等學校之設、誠憾事也。請納貲建立用紀奉祝。」縣尹伊東喜八郎深韙其議、乃相地於城東、經始焉。是實元校之所由翺始也。十二年冬十二月、舊學習院教授南日恒太郎補學校長、基業益張。翌年秋東宮殿下簡特使閱校況。僉以為榮。

昭和三年、今上即位之歲、本校體制已完成矣。土地剛燥、規模宏敞、東通劔山之靈、西挹神江之勝。黌堂寮舍巍然聳立、凡百施設咸莫不完備。會南日校長遽殉于職、教授柴山槐郎繼其任。於是內外相謀卜十月十七日舉行開校祝典。是日也、朝野官民來助其儀者以千數、蓋亦盛矣。於戲、本校翺于東宮成婚之時、而成于今上即位之際。天下未有如斯休美者也。況又嘗沐我皇眷顧者哉。

列籍本校者、仰而思之則不待發揚倡導而自有所感奮興起者矣。然則建碑紀盛。豈獨傳諸不朽云爾哉。

# 碑文に記された旧制富山高校開学と天皇

- ・ 大正11年9月28日  
(1922) 皇太子納采の儀
- ・ 大正13年1月26日 皇太子成婚の儀
- ・ 昭和3年11月10日 天皇即位の礼

- ・ 大正12年5月（「前此」）  
馬場はる 寄附願
- ・ 大正12年7月 県会満場一致で決議
- ・ 大正12年12月 南日恒太郎 校長就任
- ・ 大正13年4月15日 第一回入学式
- ・ 大正13年11月8日 「東宮侍従御差遣の事」  
（陸軍大演習御統監8日小矢部行啓 10日富山市行啓）
- ・ 昭和3年7月20日 南日校長逝去
- ・ 昭和3年10月17日 開校記念の祝典

「立山の  
空に聳ゆる  
雄々しさに  
ならへとぞおも  
ふ御代の姿も」

（摂政宮、後の昭和天皇御  
製大正14年歌会始「山色連  
天」）

「これぞこの  
さとしの御歌  
巖ならぬ  
われらが身にも  
とはに刻まん」

（大正14年9月15日岡正雄知事  
の命により南日恒太郎校長の  
实地検分『立山詣歌日記』）

富山高等学校開校祝典記念品  
御歌所長・入江為守子爵書

- 右 御製（昭和14年歌会始「山  
色連天」）  
左 皇后御歌（昭和15年歌会  
始「河水清」）



# 記念品説明書

故南日校長はつとに敬神尊皇の念に厚く、つねに今上陛下御製「山色連天」皇后陛下御歌「河水清」を拜誦し、深く御聖徳を仰ぎ奉り、日夜育英の事業にいそしんで居られました。ついては本校開校の祝典を擧ぐるに當り、特に御歌所長入江子爵閣下の謹書を請ひ、之を記念として御頒ちすることに致しました。

富山高等學校

## 碑文に見る天皇に関する記述の背景

- 当時の時代思潮
- 超「官立」（＝天皇の権威）の希求（教育文化の機関は常に隣縣石川新潟に奪われ、官立高等学校の如きも亦彼の二縣の有する所となったのは縣民の齊しく遺憾とするところであった。『富山高等学校十年史』）
- 南日校長が抱いていた厚い敬神尊皇の念

根底にある馬場はる刀自及び県民の思い

縣下未有高等學校之設、誠憾事也

# 参考

『越中の文学と風土』

(広瀬誠著、桂書房刊、1998年)

『南日恒太郎遺稿と追憶』

(田部隆次編、1934年7月)

『復刻版 富山高等学校十年史』

(平成11年)